

第二回 平成二十三年六月十八日

歴史にみる西宮・阪神 —近代黎明期をめぐって—

尾崎 耕司



はじめに

○尾崎耕司講師 大手前大学の尾崎でございます。本日の講師を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、ご承知のとおり、今年度の大手前大学の公開講座は、二回を一組といたしまして、一回を座学に、そしてもう一回は体験をしていただくという組み合わせで実施させていただいております。そこで今回は、歴史にみる西宮・阪神をテーマに、少し焦点を絞らせていただきます。平成二十年（二〇〇八）の十一月に市内の門戸厄神東光寺に開館されました、地域の史料や文化財の保存活用施設である松風館を取り上げ、地域の歴史について考えてみたいと思っております。今回、六月は私が講義形式でお話をさせていただき、次回七月は松風館館長でいらっしゃる大崎正雄先生に御協力を賜りまして、ご講演と、展示されて

おります文化財等の見学をさせていただこうと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、今回のお話は、そのプラン自体は昨年のうちに決まっておりますので、まさか東北であのような大きな震災が起こると思つてはならず、少しつらいお話から始めないといけません。一九九五年の一月は、我々にとりましては阪神・淡路大震災という、西宮にも非常に大きな被害を及ぼした地震が起こりました。西宮神社では、国の指定文化財で、豊臣秀頼がその建設にかかわつたと言われる表大門に被害を受け鳥居などが崩落いたしましたし、同じ西宮神社の国指定の文化財、おわりべい大練塀は完全に崩れてしまいました。

大手前大学でも、当時の本館が崩壊し、また当時は女子大でありましたけれども、二人の学生さんが下宿で尊い命を落とされたと聞いております。本日の話に登場いたしますところも実は阪神の震災で大きな被害を受けられました。

まずは辰馬本家酒造です。ここは、「白鹿」の銘柄で申し上げたほうがいいかとは思いますが、明治二十五年（一八九二）に建てられたレンガ造りの酒蔵が崩壊をしてしまいました。今は、ユニクロからさらにジーユーと名前が改まった建物になっているんですけども、そこでは酒づくりの道具類も大破したと聞いております。そこで大急ぎで倒壊した瓦れきを撤去しないといけないものですから、その片づけを行おうとして、あやうく建物内に保管されていた古文書類も一緒に廃棄されそうになりました。これ

を、白鹿記念酒造博物館の職員の方々が慌てて取り出されたのです。

また、門戸厄神から甲東園にかけての地区でも大きな被害が出ました。新幹線の橋桁が落ちたことなどは、ニュースで流れましたのでご記憶のある方も多いと思います。そうした中で、やはり東光寺周辺の旧家が大きな被害を受け、それを東光寺や地区の皆さん、あるいは大崎先生を初めとする方々、さらには神戸大学などを中心に結成された歴史資料ネットワークの人たちが協力をして、文化財の救出に当たられたわけです。

このような中で、救出された史料を保存して公開をするために設置されたのが、今回ご協力をいただく松風館です。門戸厄神の駅から山へ上がっていったところにあります。東光寺の階段の下のほうの大きなお屋敷の後につくられています。今回のお話は、不思議な縁で震災が結びつけてくれることになりました。

そもそもの出発点は、辰馬本家酒造から私どもの史学研究所に、被災し救出された古文書の中に、明治期のマッチ製造に関するものが出てくるので、それを整理してもらえないかとの要請をいただいたことから始まります。これを私共でお受けいたしました。その結果を史学研究所の報告集に掲載させていただいたのですが、そこから更に知見を深める史料はないか、特にマッチ工場を実際に切り盛りをした人に中島成教せいきょうさんという方がいらっしゃるのですが、その人のことがもっと詳しくわからないかなと思案をして

いました。そこへ偶々東光寺の史料整理に関わられた神戸新聞の大国正美さんから、東光寺で中島家の文書が見つかり、松風館に保存されているよと教えていただきました。そこで、早速松風館に連絡をして大崎先生のほうから中島成教氏文書の中にマッチ関係の史料があることをご連絡をいただき、ここに最初は一つの点でしかなかった事柄が一本の線につながってまいったという訳です。

そこで、本日は、松風館に保存をされている中島成教氏文書を紹介させていただきました。また同時に辰馬本家酒造の史料も使わせていただきまして、現在わかるようになってまいりました西宮とそして阪神間の明治以降近代の歴史について、何かお話をさせていただこうかなというふうに考えた次第でございます。それをもちまして、次回お越しいただきます現地見学会の予告編のような形になればいいというふうに考えている次第でございます。どうぞよろしくお願いいたします。(以下、敬称略)

第一章 門戸村と代官中島家について

この章では、いきなり本論のマッチというお話に絞ってしまいますと、恐らくわかりにくくなると思いますので、前提になるようなお話をさせていただきます。

まずは、中島成教の出た中島家についてです。ここは、江戸時代から門戸村の代官を務めた家でありま

した。代官であります。しかも誰の代官かという点、尾張藩になります。尾張藩のしかも尾張徳川家ではなく、そのまた家来、家老であった石河いしごという家の代官として、門戸村と瓦林村（別名、御代村みよ）。現在のJR甲子園口駅南側）を治めたというものですから、少しややこしいお話になってまいります。

そこで少し説明をさせていただければと思いますけれども、まず門戸村についてであります。西宮市域というのはご存じのように大正十四年（一九二五）に西宮が市制を施行しまして、それ以降、戦前戦中から戦後にかけて町村合併を繰り返して、今の市域ができたわけですけれども、それ以前には、明治二十二年（一八八九）に町村制が施行された頃、阪神西宮駅一帯の西宮町と、その北に大社村、そして今津村、芝村、甲東村、瓦木村、鳴尾村、さらには有馬郡の山口村、塩瀬村と、これだけ旧行政町村がありました。さらに江戸時代になると村はもっと細かくなります。今回、お話しする門戸村の位置する甲東地区だけでも門戸村、下大市村、上大市村、樋口新田、段上村、神呪村かんのち、上ヶ原新田と七カ村もありました。門戸村は、国道の一七一号線、いわゆる旧西国街道と、阪急の今津線とが交差する門戸厄神駅の北西一帯になり、もちろん門戸厄神さんなどが入ります。

そうすると、普通このあたりであれば、西宮町などは江戸時代の後半には幕府直轄領になりますけれども、それ以外はおおむね尾崎藩領ですから、門戸村も尾崎藩かなと思うのですが、そうではありません。江戸時代は、様々な権利関係が輻輳しますので、領地も入り組みます。甲東地区では、段上村と上ヶ原新

田も一部を除いては尼崎藩領、上大市村などは旗本の青山氏の領地になります。この青山氏というのは、元来幕府の三大將軍の家光の頃、尼崎藩主は青山氏でしたから、その由緒で青山氏が転封した後も分家が引き続きこのあたりを領有したわけで、その意味では尼崎藩とのつながりがまだわかるのですが、ところがこれに対して門戸村と瓦林村だけが尾張藩石河家領となります。これは不思議ですね。

そこで、私は必ずしもこのあたりの専門ではないので、やや素人談義になりますけれども、今、松風館に収められている中島成教氏文書を見ると、明治初年、最後の領主の名前が出ており、「石河太八郎」となっています(中島成教氏文書 TKF2-1)。これを尾張藩側の史料で見ますと、徳川林政史研究所所蔵の『藩士名寄』という名簿のなかに、「石河孟二郎」という人物で、嘉永六年(一八五三)に父が病氣隠居をしたので、家督を継ぎ、明治の頃に「太八郎」を名乗る人が出てきます。この人が、最後の領主であると思えます。

それでは、この石河太八郎はどんな人物でしょうか。この『藩士名寄』を続けて見ていくと、「御前加判」と書いてありますから家老だというのはわかりますし、安政四年(一八五七)ですから、ちょうどペリーやハリスなんかがやってきて、通商条約を結ぶ前年になりますが、その年に「諸大夫」に仰せつけられたとあります。諸大夫というのは、もちろんこれも家老を指す言葉ではあるのですが、さらに尾張藩の藩士でありながら、直接朝廷から従五位下という位階をもらえるといるものです。尾張藩のような大藩であれ

ばこそ就けるという特権的な立場にあります。それに任じられているのです。ですから、石河太八郎というのは、やはり相当の有力者であろうということがまず想像できるようになってまいります。

そこで一体、なぜ尾張藩の上級の家老が西宮に領地をもらうのか。門戸村とは一体どんな関係があるのかという話になってまいります。そもそも石河氏は、美濃のあたりの出身だったそうです。信長や特に豊臣秀吉に仕え、関ヶ原の合戦で家が東西両軍に分かれて戦った後、徳川方について一族が重用されて、尾張家が創設されるときに、初代藩主徳川義直の付家老として名古屋入りをしたそうです。また、関ヶ原の前にさかのぼると、石河光元という人が最初播磨の龍野に一万石の領地をもらった大名だったらしいのですが、この人が別名を「石河久五郎」と名乗っています。一方、中島成教氏文書の中に、文禄三年（一五九四）の摂津国武庫郡門戸村検知帳が残っているのですが、その中に門戸村の検知に当たった秀吉の代官として「石河久五」という名が出てきます。恐らく両者は同一人物です。

つまり、石川久五郎光元という人の、彼自身は関ヶ原で石田三成方についてしまい失脚してしまいますが、その息子の一人光忠が徳川方について、その後尾張藩の家老となったわけで、そこで、もとは一万石取りの大名であったわけですから、その人物をわざわざ家康は自分の息子の付家老にするので、それなりの待遇を残さないといけなかったんだらう。このこともあって、徳川時代になっても太閤検地以来の由緒を持つ門戸村を石河家は領地として持ち続けたのではないかと考えます。

西宮市域については、これまでは尼崎藩の領地であったところはかなり研究が進んでいます。上瓦林村の岡本家という大庄屋を務めた家の史料が残っていますので、西宮市なんかは随分研究が進んでおり、全国的にも知られていますが、他方、このような飛び地として存在していたところは、必ずしも詳細にはわかっていませんでした。

ですから、今この中島成教氏文書が公開されたことで、西宮の歴史のよくわからなかった部分に光が当たる可能性が出てくる訳です。その意味でも貴重な史料であります。

そこで、このような経緯で尾張藩の飛び地になったのが門戸村でありました。同じ飛び地の瓦林村もあわせてこれを支配するには現地に代官を置くことが必要になりましたので、それで白羽の矢が立ったのが中島家であったようです。ですから、代官として徳川時代から名字を名乗ることが許されています。周りと少し格の違う家だったわけです。この家を幕末から明治期に当主として継いだのが、中島成教です。そこで次に、中島成教について見ていくことにしましょう。

第二章 中島成教について

中島成教は、西宮の辰馬本家の出で、十代の当主であった辰馬吉左衛門の三男として生まれました。そこから門戸村の中島家に養子として入られたようです。中島成教氏文書の中にも、当時の人別の送り状が残されています。そこでは、「当町辰屋吉左衛門、弟鹿蔵、当年十九歳と相成候者、此度、其御村方、中島六郎右衛門方江養子ニ差遣度段」（中島成教氏文書 KEI-21）とあり、もとは辰屋鹿蔵という名であったのが、十九歳で中島六郎右衛門（他の文書では中島六左衛門と記しているものもあります）の養子として入ったということです。

同じ文書に中島成教が養子に入ったのが元治元年（一八六四）十月と記されています。幕末の動乱の時期です。するとここから面白いことが出てまいります。中島成教氏文書には、他に「元治二年 芸州広島表御陣払御行列 丑 正月六日 御陣払」（中島成教氏文書 KEI-1）と表書きされた帳面が残されています。元治二年（一八六五）正月ということは、前年の一八六四年に例の長州藩が禁門の変（蛤門の変）で朝廷、京で戦乱を起こし、敗北の結果、朝敵藩の汚名を着せられる年です。そして、それに引き続いて、幕府が第一次長州征伐を行い、長州に三十六万という大軍を派遣するのです。「広島表御陣払御行列」というのはこの時のもので、勝利した幕府軍が行列をなして広島から引き揚げてくるときの行列の模様を書

き写したものです。この中には「中島孝之丞」の名が見え、中島家の当主がこの行列に加わっていたようです。

実は、この時の幕府の長州征伐軍の司令官に任命されたのは、尾張藩の前藩主徳川慶勝でした。ここで尾張藩が出てくるのです。この人は、長州藩を取りつづす命を受けて出陣したはずなのに、勝手に方針を転換し、長州藩を本当につぶしてしまっただけでいいと考へて話し合いを始め、とうとう長州藩の家老三人の切腹をもつて長州藩を取り潰さないという形で妥協して帰ってきてしまいます。長州藩の連中からも感謝されたでしょうし、この長征軍で司令官として彼の横にいたのが薩摩の西郷隆盛でしたから、薩摩と長州という、後の明治維新を担う両藩の人たちがこの徳川慶勝という人を見ていたのです。徳川最後の將軍、徳川慶喜と徳川慶勝は従兄弟です。しかし、後に倒幕の段階になると、薩長方は、この慶勝だけは政府軍に引き入れようとしています。何とかこの人を引き離して、薩長の側に入れて、それが幕府方と新政府方の勝敗を分けたといわれるほど、幕末明治維新期の政治の鍵を握ったわけです。

そこで、話が長くなりましたけれども、このような経緯を背景に、第一次長州征伐から帰ってきたときに作られた記録が先の帳面です。「御陣払」というのは、単に帰ってくるのではなくて、勝つて凱旋をしてくるといふ意味があります。中島孝之丞は尾張藩石河氏の代官として、誇らしく凱旋を飾ってこの記録を作らせたようです。

この帳面の裏面には、「中島孝之丞陳図 成教写之」と記されています。凱旋して帰ってきた孝之丞が「陳図」、つまり軍の行列を描き、成教がこれを書き写したというのです。元治二年正月といえは、中島成教が養子に入ったのが元治元年十月のことでしたから、そのすぐ後にこのような幕末の動乱の模様を目の当たりにしたことになります。門戸村が尾張藩の飛び地であったからこそ遭遇したのでしょうか。

さてそこで、中島成教ですが、このような経験を経て明治維新の後になると実業の世界に踏み込んでいくこととなります。阪神電鉄の創設にかかわり取締役になるなどがそうです。その中で、実業の世界に飛び込むにあたって手始めとしてかかわったのが実家である辰馬本家と共同で経営をしたマッチ工場でありました。神戸の「日出館」と申します。我々は、ようやくここから本題である神戸のマッチ工場、日出館について見ていこうと思います。

第三章 神戸マッチ製造場Ⅱ日出館

まず一つ史料を見ていただきます。

燐寸工業場御払下願書

本県監獄場前ニ御設置相成居候燐寸工業場ノ儀、今般人民へ御払下（被カ）可成（被カ）成趣伝承仕候附、一応現

場拝見ヲ願、別紙御目錄ニ対照シ勘辨仕候処、別紙見積書位ノ代金ニテ御払下ヲ蒙候得ハ、将来目的
モ可相立様奉存候ニ附、右直段ニテ御払下成被下度、依而此段願上候也。

明治十七年七月廿八日

摂津武庫郡西宮町浜ノ町四百六番地

辰馬吉左衛門 ㊦

前書願出候ニ付奥印仕候也

戸長 畠山市兵衛

兵庫県令森岡昌純殿

〔燐寸工業場御払下願書〕『辰馬本家文書』

これは、辰馬本家に残された文書で、明治十七年（一八八四）七月、同家第十一代の当主辰馬吉左衛門から当時の兵庫の県知事、森岡昌純に出された、マツチ工業場払下の願書です。ここでは、見られるように兵庫県が当時神戸の宇治野町に置かれていた監獄で、収監された囚人を使って製造をおこなっていたマツチ工場を払い下げを受けたいとの願い出がおこなわれています。ここに揚げたもの続く部分では、土地建物や附属の機械類をあわせて七〇〇〇円で払い下げがおこなわれたとも書いています。七〇〇〇円ということ、明治の十年代ですと、当時の一円が今の五万円ぐらいと見積もって三億円といったところに

なるでしょうか。

また、同じ辰馬本家の文書には、「燐寸製造場元帳」と標題の付されたものがあります。そこでは設立される製造場設立について次のように述べられています。

抑本館ノ成立ハ、元ヨリ当家（辰馬本家―注、尾崎）一名義ヲ以テ官民諸般之事業ヲ執レリト雖、其實組合事業ニテ、其銘々ハ渡邊おみさ（当時武庫兔原郡長タリシ渡邊徹殿ノ長女ニテ即後見人ハ渡邊徹殿也）、深山玄碩、中島成教ノ三氏ニシテ、其中、中島氏ヲシテ事務ヲ負担セシムルコトトシ旺ニ製造ノ事業ヲ開ケリ

（「燐寸製造場元帳」『辰馬本家文書』）

ここからは、この払い下げにもとづき設立される工場が辰馬本家と、武庫郡と菟原郡（うはら 若屋から三宮あたりにかけて置かれた郡）の郡長渡邊徹の長女おみさ、そして西宮の医師深山玄碩（みやまげんせき）、そして中島成教の四名による共同出資で行われたことが分かります。出資の割合は、当初、辰馬本家が資本金七千円の半額を辰馬本家が出し、残る半額をあとの三人で分割したとなっています。

このマッチ工場の現地での事務運営を中島成教がおこないました。こうして明治十七年（一八八四）から同二十四年（一八九一）まで開かれる神戸のマッチ工場「日出館」が設立されました。

マッチは、決して今日のIT産業のような高度な技術が必要なものではありません。しかし逆に高い技

術が必要でないこと、大きな資本金も要らないことから、参入がしやすい業種でありました。明治というまだこれから産業が発達する時代にあつては、中国やその他に輸出をして外貨を稼ぐ、花型産業であつたのです。

横山源之助が記した『日本の下層社会』(一八九八年)によると、日清戦争の頃の明治二十八年(一八九五)、日本全国のマッチ総生産額は五五〇万二二三〇円で、そのうち輸出額は四六七万二八一円になります。これは、当時の日本全体の「完成品」(≠工業生産品)の輸出総額四五四万二〇〇〇円の一割強を占めていたことになります。マッチの主要な生産地は、神戸と大阪でした。同じ一八九五年の統計では、兵庫と大阪二府県のマッチ総生産額は四五八万八七一七円(兵庫三五七万二〇四一円、大阪一〇一万六六七六円)で、この二つの県だけで、日本全国のマッチ生産の実に八十三%のシェアを占めていたんですね。

ところが、明治期の主要な産業であつたマッチ製造なんです、残念ながら実のところこれまで余り詳しいことはわかっておりませんでした。史料が不足をしておりましたので、特に神戸のマッチ製造の黎明期に当たる明治の十年代や二十年代前半についての情報がほとんどなかったわけです。もう少し述べますと、神戸のマッチ製造は、明治の十年に次の三つのきっかけがあつてできたとされてきました。

まず第一は、「堀某」という人物が下山手通りに燐寸の製造場を開設した。しかし余りうまくいなくて、しばらくしてつぶれたという話と、第二は、淡路島洲本の士族の有志が共同でマッチ製造を開始したとい

うもの、これも余りうまくいかず、すぐにつぶれたらしいのですが、それと並んで第三が、兵庫の監獄使役場の附属工場でマッチ製造を開始したというものです。つまり、監獄附属のマッチ製造場というのは、神戸におけるマッチ製造の原点の一つとされているものなのです。ところが、この監獄のマッチ製造場というのが、その後どうなったのかが余りよくわかりませんでした。燐寸工業会の編さんした『燐寸産業発達史』という本では、明治十四年（一八八一）に発火危険物取扱禁止令という法令が定められ、そのあおを受け、監獄内でのマッチ製造が禁止、当時ドイツ製の機械などを入れていたそうですが、それなどを含めて辰馬家に払い下げたとあります。ここまでは分かっているのですが、その後どうなったのかが分かりませんでした。今回の辰馬本家文書は、この点が明らかになるのです。

ここで少しお断りしておかないといけないのは、これらは白鹿記念酒造博物館の職員の方々の努力で文書の存在が知られるようになったということです。もし辰馬本家酒造が震災で大きなダメージを受けたあと、史料が瓦れきに埋まっていたら、永久にこれらのことはわからなくなっているところでした。文書はダンボールで二箱、件数で一七〇点ほどのものです。博物館の皆さんの努力には改めてここで敬意を表させていただきますと思います。

また、このマッチ工場Ⅱ日出館の切り盛りをしたのが中島成教であります。これも同じく震災から被災した門戸地区の中島家の文書の中で発掘をされたわけで、辰馬本家の史料と中島家の史料を両方合わせ

ると、今までわからなかった歴史の空白がわかるということになったわけです。不思議な縁ではありますが、そこで設立された日出館について具体的に見ていきたいと思えます。

第四章 中島成教氏文書が語る日出館

ここで改めて辰馬本家ついて触れておきたいと思えます。辰馬家は、旧幕時代の寛文二年（一六六二）といえますから、四代將軍家綱の頃であろうと思えますけれども、そのころに創業した西宮の老舗の酒蔵であります。もとの屋号は辰屋さんであったようです。この辰馬家は、幕末から明治のこの頃にかけて一つの転換点を迎えます。それと申しますのも、安政二年（一八五五）、それまでの当主第十代吉左衛門が急逝し、代わって第十一代の辰馬吉左衛門が家督を継ぐのですが、若くして相続をいたしましたので、その母堂、十代目夫人のきよ女史が、番頭の辰栄之介と一緒に十一代目を支え、店の切り盛りを行っていくようになります。

この時期に辰馬家は発展をいたします。本業の酒蔵業では、明治の初頭に四〇〇〇石程であった生産高が、明治の十年代に七〇〇〇石、明治二十年（一八八七）には一萬五〇〇〇石を数えるようになります。蔵数も一六にまで増えたといわれています。また、経営の多角化が行われたのもこの時期でありました。

マッチの製造というのはこうした多角化の一環として行われたのです。

また、この第十代から十一代にかけては、分家も行われました。まず第十代吉左衛門の三女の婿である辰馬悦蔵が北辰馬家を興こし、今日の白鷹株式会社の元を築かれました。あるいは、同じ第十代吉左衛門の四男、辰馬喜十郎は南辰馬家を興して、現在旧辰馬喜十郎住宅という名称で兵庫県と西宮の指定文化財になっている洋館を建てられました。

そして、十代目の三男であつた鹿蔵が中島家の養子、中島成教となつたわけで、マッチ製造への参入も、辰馬家が全体として江戸時代から明治へと時代の変化に対応する中でおこなわれたわけです。

さて、その中で、日出館の話に戻りますと、生産高が伸びていきました。ここで日出館そのものについて述べていこうと思います。日出館が払い下げを受ける以前の監獄時代のマッチ製造場については、大手前大学の卒業生、山内祐樹さんが卒業論文（山内祐樹「明治期の神戸におけるマッチ工業について」、大手前大学人文科学部提出卒業論文、二〇〇九年）において詳細を明らかにされています。それによると、監獄付属として経営された時代、そこは当初大変劣悪で、衛生状態も悪くて働きづらい職場だったらしいのですが、これが途中から投資がおこなわれ、ドイツ製の製造機械を導入し生産量を増していきました。ところが、政府の危険物取扱禁止令が出されたことによりその規制対象となつたので、民間への払い下げがおこなわれたようです。

ここで〈表1〉を見ると、これは日出館の出荷高の推移をあらわしたものです。これを見ると、明治十八年（一八八五）上半期に五〇二トン、同下半期一〇五〇トン、そして最盛期を迎える一八九〇年上半期では一八六七トンにまで達しているのが分かります。今、売上額については後述することになりますが、このことに気をよくしてか、辰馬本家では明治二十年（一八八七）になると、神戸の日出館とは別に地元西宮に日新館というマッチ工場を建て製造を始めたようです。

明治二十二年（一八八八）における神戸港のマッチ輸出高を見ると、日出館が箱数で二七六三箱、日新館は五五〇八箱を記録したといえます。同じ時に神戸を代表するマッチ業者、播磨幸七の明光社は六二〇八箱、滝川儀作のところは五三六三箱ですから、それに並ぶ数字であったわけです。

さて、ところが、実は結論的に申し上げますと、こうしてできた神戸の日出館も残念ながら長くは続かなかったようです。明治

表1 神戸日出館生産高の推移

年	半期	生産量 (t)	売上額 (円)
1885	上	502	796
	下	1,050	1,608
1886	上	1,025	1,693
	下	1,603	1,865
1887	上	1,677	1,888
	下	1,531	-
1888	上	1,385	734
	下	1,342	1,311
1889	上	1,773	3,109
	下	1,139	2,458
1890	上	1,867	1,968
	下	1,787	17,969

〔明治 自17年至24年 決算報告書〕
 『中島成教氏文書』より作成。数値は概数。

十七年（一八八四）に創業して、明治二十四年（一八九一）ですから、わずか六年半ほどで幕を閉じることとなります。

その閉鎖される過程については、中島成教が日出館の館主でありましたから、神戸に実際に滞在し実務を担当していただけに、門戸村の中島成教氏文書の中に詳しく記録が残されておりました。ここでは、時間の関係で二点ほどに絞って説明したいと思います。

まず第一は、監獄附属の製造場の払い下げを受けた関係上、日出館も引き続き囚人をもってマッチ製造していたのですが、「茲ニ監獄移転役囚引移リニ付、同年（一八九一年）注、尾崎）四月廿一日ヲ以テ工業ヲ廢業シ、尔来残務ヲ整理シ、同年六月二十日ヲ以テ決了ヲ告ケ解散ス」（「神戸日出館明治十七年八月創業ヨリ明治二十四年四月閉鎖ニ至ル營業ノ實際損益精算報告綴」『辰馬本家文書』）とあるように、監獄自体が他へ移転となり、囚人労働が得られなくなったので閉鎖のやむなきに至ったというのです。

第二に、もう一度（表1）に戻ると、生産量は順当に伸びているのに、売上高はかなり波があり乱高下を繰り返しています。たとえば、一八八六年の上半期は前期よりも出荷量が減っているのに売上高は増えています。これは何なんだろうということですが、そして、最後にちよつと異様な数字があります。ずつと千円からせいぜい三千円ぐらいで推移をしていた売上額が閉鎖をされる一つ前の期に一万七九六九円という物すごい額にはね上がります。これは何でしょう。

ここで、次の史料をみてみましょう。

(明治二十二年下半年) 本期ハ恰モ燐寸業者ノ凶歳ト云フヘキ季ニシテ、遂ニ本期中活発ナル商況ヲ見ス、如之素品ノ或一品非常ノ高価トナリテ原価ヲ昂ムルニ至リ、而シテ製品ハ益不捌ケトナリシヨリ、左記ノ如ク百壺番館ニ託シ販売ヲ試ミタルモ是又意ノ如クナラスシテ大ニ予考ヲ損シタリ、是レ畢竟スルニ本期中ハ概シテ銀貨昂騰ノ余波ニシテ如何トモ難止、商勢遂ニ九百拾參円余ノ損失ヲ醸スニ至レリ。

「明治 自十七年至二十四年 決算報告書」 『中島成教氏文書』

ここには幾つか面白いことが書かれています。まず、明治二十三年（一八九〇）というのは、日本が近代の資本主義社会に移行して初めて遭遇した本格的な資本主義恐慌の年です。全国的に経済が衰退した年なのですが、その中で特に輸出を主におこなっているマッチ業界では、銀貨高騰の余波を受けていると書いています。これは重要です。我々普通当時の通貨というのは、金本位制という言葉がありますように、金貨を中心に立っていると考えるのですが、ところが明治期には、一時期金ではなしに銀本位制をとった時期がありました。一八八五、六年のあたりから、日清戦争で清国を破ってその賠償金で金本位制に移る明治三十年（一八九七）までです。明治十年代、金と銀の交換の比率がかなり変動し銀安になります。銀の価格が暴落し、幕末の段階では金のコイン一枚を銀のコイン十五枚と交換していたのが、この頃には

金一枚が銀十八枚にまで交換できるようになったといえます。したがって、銀本位にしておけば、イギリス人やアメリカ人からすると、日本の商品が安く感じるので輸出が増えたのですが、明治二十三年（一八九〇）になって銀が高くなる。これは、アメリカが銀安傾向を不等競争と批判し、シャーマン法という法律を作ったことが影響しているといわれますが、このために日本のマッチが割高となり売れなくなってしまうのですね。このことが破綻をもたらす結果を招く要因となりました。

また、明治二十三年（一八九〇）下半期に急に売上高が一万七九六九円九二銭七厘にまで跳ね上がる件ですが、これはやや複雑です。この数字は、同期のマッチ一七八七トンの売上高ではありますが、ただしこのうち金四四八八円（マッチ四七〇トン相当）は、「百壺番館へ出荷シ、依託販売ヲナシ、此荷為換金トシテ仮収セシモノナレハ、未タ該荷物ニ対シ代金過不足判明シ難キモ、仮ニ右金高ヲ以テ売却セシモノト見做シ、決算ノ報告ヲナス」（「明治 自十七年至二十四年 決算報告書」『中島成教氏文書』）として計上されたものだといえます。神戸の百壺番館というのは、シモン・エバレンスという外国資本の商社であります。ここに依託販売をしたところ焦げ付いたようで、その代金の過不足がわからなくなっている。そこで売上金をどう書いておくべきかわからないけれども、決算もあるので仮に書いて報告するというのです。随分無茶な話ですね。

このころ、この日出館といい、西宮につくられた日新館もたしかアメリカ系のフィロンロー商会という

のに委託販売をして貿易をしています。この時代は居留地貿易がおこなわれていましたので、日本人自身が海外へ赴いて貿易することができませんでした。そのため外国人に委託販売をしなければならなかったのですが、これが災いしたようです。

これ以外にも、明治二十三年（一八九〇）に第十一代辰馬吉左衛門が急逝し、その夫人の辰馬たきが第十二代当主を継がなければならなかったことなど、非常事態も相俟ったようです。以上のような要素が幾つも重なってしまい、西宮の日新館は残りしましたが、神戸の日出館は閉鎖になったのです。

以上論じてきましたように、中島成教氏文書が出てきたことで、かなり詳しく神戸のマッチ業の話がわかってまいりました。この後、まださらに検討していかないといけないことはたくさんありますが、時間が来ておりますので、ここで終わらせていただきたいと思えます。有難うございました。

どうも長時間にわたりまして、ご静聴ありがとうございました。

○司会　ありがとうございます。せっかくですので、ご質問をお受けしたいと思います。どなたかご

質問の方、挙手をお願いします。

○受講生　日新館はいつまで続いたんですか。

○尾崎耕司講師　閉鎖をした年はわからないんですが、少なくとも明治の末年の明治四十年代までは営

業が続いていることが、史料から確認できます。

○司会　よろしいでしょうか。

○受講生　同じことなんですが、日新館のほうは同じような問題はなかったんですか。

○尾崎耕司講師　貿易がやはり同じ頃に随分傾いているのはあります。日新館のほうは、フィロンロー商会に欺かれてしまったようです。品物だけ持っていかれ、代金を全く払われないので一八九二年に裁判になっていきます。また、同じ時期に香港の商社とも裁判沙汰になっています。ですから、深刻といえ、日新館のほうが深刻だったかもしれません。

○司会　ほかはよろしいでしょうか。

○受講生　一点は、大阪は素材が輸出しやすかったということなんです。また、同じ史料が震災によって、博物館と門戸厄神で出てきたことは分かったんですけども、逆に言いますと、博物館に古文書があつて、そこまでの研究ができていなかったというようには理解されないのですか。

○尾崎耕司講師　ありがとうございます。

一つ目は、原材料の入手のしやすさということで、日本で特に阪神間で燐寸が盛んになった理由に、マッチを製造するには硫黄が大量に必要となるのですが、日本の場合火山国で、硫黄が手に入るという利点があつたのと、阪神間は、マッチの軸木のもとになる間伐材が、北海道から、伝統的に西廻り航路と

いう、北前船という名前でご存じだと思いますけれども、日本海から瀬戸内海を通過して大阪に入るルートが発達しているんですね。それがありますので、北海道からの輸送の関係上一旦大阪に入ってきたと言われます。

そしてもう一つ、重要な薬剤であるリン等の薬品は中国からの輸入となりますが、華僑と呼ばれる人たちの存在が大きかったので、神戸や大阪には、赤リン等が手に入りました。

三つ目は史料ですが、これはむしろ次回大崎先生の方から実際の物を見せていただきながらお話をしていただけだと思います。震災の際に、もともと先ほど図版で松風館さんの建物のお写真を見ていただきましたが、そこが中島さんのお家だったところですね。それが倒壊し、そうした中でようやくそのお家に所在していた文書がわかったようないきさつがあります。正確なところは、また次回、もし機会があればお聞きいただければと思います。ありがとうございました。